

## 〈日仏演劇協会会報巻頭言〉

## 様変わりの演劇と観客

伊藤 洋

最近芝居を観に行くと、劇場に入っただけで気がつく。多くは緞帳も幕もなく舞台が丸見えになっている。その舞台にほとんど舞台装置がないこともある。芝居が昔、と言ってもここ3、40年ほど前のものと比べてもかなり変わってきていることは、誰でもすぐ気付くことだろう。

近頃は舞台上にがっちり組んだ舞台装置、木組みなどはめったに見られない。むき出しの舞台があるだけ、そこに椅子や机があるのみのことも多い。時にはその椅子なども開幕してから役者が運んできたり、持ち帰ったりする。それも演技のうちなのである。また装置の一部としての扉だけを運んできて、それが家の玄関あるいは部屋の入口を表したりすることもしばしばある。その扉をくぐったら家の中に入ったことになる。その動作を補うかのように、場面転換を示す照明の変化も頻繁に使われる。

舞台の背景には映像が流され、まったく雰囲気を変えられることもある。照明や映像によってこれまでのような舞台装置をまったく使わなくてもよいことさえある。そのあたりは演出家や美術担当者の腕の見せ所でもある。映像をうまく使って顕著な成果を挙げたのが、昨年暮れのクローデル『縞子の靴』の京都公演（翻訳・演出：渡邊守章）であろう。

劇の内容面でも大きく変化している。とりわけ古典ものを上演する時には往々にして、劇に外枠を付け加えて構成したり、場面を入れ替えて構成し直したりする。蜷川幸雄演出のシェイクスピア『マクベス』が仏壇開きから始まったのを覚えておられる人は多いだろう。最近でも、例えば昨年11月の演劇集団円公演の『景清』（原作：近松門左衛門、脚本：フジノサツコ、演出：森新太郎）でも、平景清（橋爪功）が盲目となった自分の人生を語る構成にその外枠を見た。

これらの演劇を観るに当たっては、観客はかなりの想像力を発揮しなければならない。公演者側と

してはその場面転換を台詞で説明する愚を避けたいし、観客に巧みに想像させなければならない。これこそが現代の演劇であり、観劇の仕方、観劇の醍醐味でもあろう。耳から聞こえてくる台詞と合わせて、その芝居の分かりやすさ、解説しやすさによって芝居の印象もすっかり変わってくることだろう。

日本では近頃は演劇が非常に縁遠くなっている人たちが多いらしい。古典と言われる歌舞伎や能楽の話ではない。現代劇の話である。現代演劇を観に行ったことがない人の比率が非常に多くなっているという。実際、地方に住んでいる人にとっては観劇する機会も少なく、「観劇」が遠い絵空事のようになっているのだろう。それに加えて上述の観劇の際に要する想像力も、慣れていない人にとっては負担なのかもしれない。演劇の見方の大きな変化によって、観客はまた敷居が高くなったと感じているのだろう。もっと演劇を身近なものにはできないか。どうすればよいのか。いわゆる大衆演劇の分かりやすさがなければならないのだろうか。

フランスでは演劇がもっと身近にあり、観劇した舞台の面白さが日常会話の端々に上るものになっている。ある人が自分の観た数日前の芝居の役者のうまさを強調すれば、道で出会った相手（多くは近隣の人など）はその同じ芝居の別の役者の良かったことをしゃべる。同じ芝居を観ているからこんなおしゃべりが成り立つ。パリに住んでいた90年代でもこのような光景に頻繁に出くわした。しかしパリでさえもそんな光景が最近はいよいよ減ってきているという。それでもまだ人々が足繁く芝居を観に行っているから、近隣の人ともこうして気軽に話せるのである。こんなことは日本ではほとんど稀なことだろう。どこに違いがあるのだろうか。演劇をもっと身近に引き寄せ、普及させることにもっともっと工夫をし、力を注ぐべきなのであろう。（日仏演劇協会会長）